

2026 年 7 月 14 日

培養室だより－第 67 回日本卵子学会学術講演会参加報告

令和 8 年 6 月 6 日、7 日川越市において第 67 回日本卵子学会学術講演会が開催され、参加してきました。「妊孕性－未来への希望－」をテーマとし、卵子や胚の妊孕性の本質についての内容を中心に、さまざまな研究や臨床応用についての発表も多く含まれた講演会でした、その中で、日々の業務において対応に苦慮している問題に関する講演があり、大変勉強になったので報告します。

一つ目は、受精に関することです。卵子に精子が侵入後、翌日に 2 個の前核が形成されたものを正常受精（2 倍体）卵と判断します。ただ、一部の卵では前核が 1 個や 3 個以上認められる場合があります。前核が 3 個以上の場合は、異常と判断しその後の培養は行いませんが、1 前核卵（胚）の一部には 2 倍体卵（胚）もあり、移植後妊娠・分娩に至ることがあります。しかし、2 倍体であるかどうか確実な判定方法はなく、移植を行う際は慎重な判断が求められます。その点に関して、1）前核の大きさ 2）胚の発育速度 3）胚のグレードなどを評価することで移植可能な 2 倍体の胚を判定できる可能性があると報告していました。ただし、この方法を用いても確実に診断できるわけではなく、さらなる検討が必要と思われます。当院では自費での体外受精を行っていた頃は、小数例ではありますが 1 前核胚の移植を行っていました。令和 4 年 4 月から保険適用となった現在では、移植の回数が 6 回または 3 回に制限されているため、1 前核胚は移植の対象から除外しています。

二つ目は、胚盤胞が成長していく過程での収縮に関することです。現在では胚盤胞に到達した胚を一旦凍結し、次周期以降に移植を行う治療を多くの方に行っていますが、胚盤胞は培養中に収縮・拡張を認めるものもあり、なかには複数回の収縮を起こす胚も存在します。今回の発表では収縮回数の多い胚は、その後の妊娠率は高くないとの報告がなされていました。当院でも、その点を考慮し凍結・移植する胚を決定しています。

最後に私事です、今回同学会の試験に合格し、生殖補助医療胚培養士の認定を受けました。これからも一生懸命頑張りますので宜しくお願いいたします。

培養室 横山